

# 私の平家物語

薄井 洋基

AYSA西部部会会員 神戸大学名誉教授

## 過去の時間への遡及

- 平家物語は今から約840年前の平家滅亡の物語です。840年と言う歳月を実感することは、人によって様々であると思いますが、私は少しずつ過去に遡って、私の生きてきた約80年という歳月を基準としたときに案外、手の届きそうな過去に起こった戦乱として体感できるのではないかと感じています。今日は過去の時間への遡及を、皆様と一緒に旅してみたいと考えます。

## ◎ 77年前 獄門島

1971年の大晦日、家内が紅白を見ている間、横溝正史作「獄門島」(1948)を読みふけていました。私はその日、たまたま本屋で手に取ったのですが、それまで横溝正史も、名探偵金田一耕助についても、何も知りませんでした。思わず引き込まれて、除夜の鐘が鳴るのも気にせずに一気に読み終えました。その後、横溝正史の著作は色々と読みましたが、「獄門島」が白眉だと思います。

戦友の死を知らせに彼の故郷である獄門島に渡った金田一耕助は、地元の寺の和尚にお世話になることになり、夜は隙間風で寒いでしょうと言われて、江戸時代の俳句が何枚か貼り付けられた枕屏風を部屋に置いてもらいます。その後、本鬼頭という網元の跡取りであった戦友が戦死したと分かった後、本家を継ぐべき3人の姉妹が次々と殺されます。3人とも先代が旅役者に生ませた美人の娘達ですが、少々狂っており、誰かが娘達が網元を継ぐことを阻止しようとすると金田一耕助には思われます。

最初の殺人は殺された末娘が梅の木に逆さまに吊り下げられており、2番目は道成寺の鐘の中で殺されていました。長女は白拍子の格好をして離れて祈祷している時に、何者かに殺害されます。

犯人捜しのキーポイントは、俳句屏風に貼られた三つの俳句なのですが、金田一耕助は崩し字の俳句が最初は詠めませんでした。

鶯の身を逆さまに初音哉

(宝井其角)

むざんやな 兜の下の きりぎりす

(松尾芭蕉)

一つ家に 遊女も寝たり 萩と月

(松尾芭蕉)

それぞれの殺人は上記の俳句を見立てて行われ、金田一耕助はもっと早く俳句屏風を読み解いていたら殺人を防げたのに、と嘆きます。

# 323年前 奥の細道

横溝正史が獄門島を書いたのは今から77年前、私が獄門島を読んでから半世紀が経ちました。また、引用した俳句は芭蕉とその弟子の其角のものです。芭蕉の「奥の細道」（1702）は次の名文で始まる奥羽地方から北陸を回り、関西に至る弟子の曾良との二人旅の紀行文ですが、芭蕉の名句がちりばめられた名作です。

## 奥の細道 序文

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり  
船の上に生涯を浮かべ、馬の口をとらへて老いをむかふる者は、  
日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。

# 芭蕉から西行への遡及

平家の滅亡を物語る源平の合戦の前に起こった二つの戦乱

保元の乱（後白河天皇×崇徳上皇）

と 平治の乱（源平の激突）

平氏 平忠盛—清盛—重盛、宗盛、知盛、重衡・・

源氏 源為義—義朝—義平、頼朝、義経

北面の武士

平清盛

遠藤盛遠 ⇒ 文覚（袈裟御前）

佐藤義清 ⇒ 西行 ← 芭蕉の最も尊敬する歌人

ねがわくは花のしたにて春しなん そのきさらきのもちつきのころ  
「山家集」

# 奥の細道31 市振り

今日は親知らず、子知らず、犬戻り、  
駒返しなどいふ北国一の難所を越えて  
疲れ侍れば、枕引き寄せて寝たるに、  
一間隔てて面の方に、若き女の声、二人ばかりと聞こゆ。  
年老いたる男の声も交じりて物語するを聞けば、  
越後の国新潟といふ所の遊女なりし。  
伊勢参宮するとて、この関まで男の送りて、  
明日は故郷に返す文したためて、はかなき言伝などしやるなり。

一家（ひとつや）に 遊女も寝たり 萩と月

# 奥の細道34 多太神社

この所多太の神社に詣づ。実盛が甲、錦の切れあり。  
往昔、源氏に属せし時、義朝公より賜はらせ給ふとかや。  
げにも平氏のものにあらず目庇より吹返しまで、  
菊唐草の彫り物金をちりばめ龍頭に鍔形打つたり。  
実盛討死の後、木曾義仲願状に添へてこの社にこめられ  
侍るよし。



## むざんやな 甲の下の きりぎりす

- ・芭蕉が奥の細道を書いてから約250年後に、芭蕉の俳句に触発されて獄門島を書くという、文学作品は数百年に渡って命脈をつなげていくものだと思います。

さて、上記の実盛については平家物語にその生涯が語られています。

現在から50年前 :

獄門島を読書、その後、奥の細道、平家物語を読み進めました。

現在から75年前 : 横溝正史が獄門島を執筆

現在から320年前 : 松尾芭蕉が奥の細道を刊行

現在から840年前 : 壇ノ浦の合戦で平家滅亡

・私は79才まで生きてきて、四捨五入すれば約100年の歳月を実感として受け止める今日この頃です。100年単位で考えると奥の細道はその3倍、源平合戦は8倍となり、千年近く立ち続けている大木を目の当たりにすると、そこには奥の細道も平家物語も刻み込まれているような気がします。

# 平家物語 卷第一 祇園精舎

それでは、本論であります平家物語について見ていくこととしましょ  
う。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常（しよぎやうむじやう）の響（ひびき）あり。

沙羅双樹（しやらそうじゆ）の花の色、盛者必衰（じやうしやひつすい）の理（ことわり）をあらはす。

おごれる人も久しうからず、唯（ただ）春の夜（よ）の夢のごとし。

たけき者も遂（つひ）にはほろびぬ、偏（ひとへ）に風の前の塵（ちり）に同じ。

遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高（てうこう）、漢の王莽（わうまう）、梁（りやう）の周伊（しうい）、唐（たう）の禄山（ろくさん）、是等（これら）は皆旧主先皇（きうじゆせんくわう）の政（まつりごと）にもしたがはず、

樂（たのし）みをきはめ、諫（いさめ）をも思ひ  
いれず、天下（てんか）の亂れむ事をさとらずし  
て、民間の愁（うれう）る所を知らざツしかば、  
久しからずして、亡（ぼう）じにし者どもなり。  
近く本朝をうかがふに、承平（しようへい）の將  
門（まさかど）、天慶（てんきやう）の純友（す  
みとも）、康和（かうわ）の義親（ぎしん）、平  
治（へいち）の信頼（のぶより）、此等（これ  
ら）はおごれる心もたけき事も、皆とりどりにこ  
そありしかども、まぢかくは六波羅（ろくはら）  
の入道前太政大臣平朝臣清盛公（にふだうさきの  
だいじやうだいじんたいいらのあつそんきよもりこ  
う）と申しし人の有様（ありさま）、伝へ承る  
(うけたまはる)こそ、心も詞（ことば）も及ば  
れね。



耳なし芳一

# 平家物語 卷第一 祇王

平家物語は、冒頭ですべてが諸行無常であることを述べながら、いきなり平清盛の悪逆非道から始まり、平家一族の権力を振り回す悪行を語っていきます。その裏で、弱き者が弥陀の慈悲にすがる生き様の一つの例として、祇王祇女姉妹と仏御前の物語として語っていきます。

# 平家物語 卷第一 祇王



清盛に近づきたいと西八条の屋敷にやってきた仏御前は、清盛に冷たくあ清とを今  
しらわれますが、祇王は仏御前を哀れに思い、取りなして舞わせます。清  
盛は仏御前に心を移し、祇王はやむなく嵯峨野に庵を結び母と妹の祇女と  
ともに念佛三昧の貧しい生活を送ります。その後、仏御前も清盛の寵愛  
を失い、祇王の庵を訪ねて共に暮らすようになりました。嵯峨野の片隅に今  
も祇王寺として小さな庵が残っています。

## 祇王寺



# 平家物語 卷第九 宇治川

平家物語の軍記物の特徴をよく現わしている 佐々木四郎高綱と梶原源太景季による宇治川の先陣争いの場面を少し読んでみましょう。

佐々木四郎が給はッたる御馬は、黒栗毛(くろくりげ)なる馬の、きはめてふとうたくましいが、馬をも人をもあたりをはらってくひければ、いけずきとつけられたり。梶原(かぢはら)が給はッたるする墨(すみ)も、きはめてふとうたくましきが、まことに黒かりければする墨とつけられたり。いづれもおとらぬ名馬なり。

五百余騎ひしひしとくつばみをならぶるところに、平等院(びやうどういん)の丑寅(うしとら)、橘(たちばな)の小島(こじま)が崎(さき)より武者二騎ひッかけひッかけ出できたり。一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木四郎高綱なり。人目には何(なに)とも見えざりけれども、内々(ないない)は先に心をかけたりければ、梶原は佐々木に一段(いつたん)ばかりですすんだる。佐々木四郎、「此河は西国一(さいこくいち)の大河(だいが)ぞや。腹帶(はるび)ののびて見えさうは。しめ給へ」といはれて梶原さもあるらんとや思ひけん、左右(さう)の鎧(あぶみ)をふみすかし、手綱(たづな)を馬のゆがみにすて、腹帶をといてぞしめたりける。

そのまに佐々木はつゝとはせぬいて、  
河へざッとぞうちいれたる。梶原た  
ばかられぬとや思ひけん、やがてつ  
づいてうちいれたり。「いかに佐々  
木殿、高名(かうみやう)せうどて不覺  
し給ふな。水の底には大綱(おほづな)  
あるらん」といひければ、佐々木太  
刀(たち)をぬき、馬の足にかかりける  
大綱どもをばふつふつとうちきりう  
ちきり、いけずきといふ世一(よいち)  
の馬には乗ったりけり、宇治河はや  
しといへども、一文字(いちもんじ)に  
ざッとわたいて、むかへの岸にうち  
あがる。



梶原が乗ッたりけるする墨は、河なかより籠撓形(のためがた)におし  
なされて、はるかの下(しも)よりうちあげたり。佐々木鎧(あぶみ)ふ  
ンばかりたちあがり、大音声(だいおんじやう)をあげて名のりけるは、  
「宇多天皇(うだのてんわう)より九代(くだい)の後胤(こういん)、  
佐々木三郎秀義(ささきさぶらうひでよし)が四男(しなん)、佐々木四  
郎高綱(ささきしらうたかつな)、宇治河(うちかは)の先陣ぞや。われ  
と思はん人々は高綱にくめや」とて、をめいてかく。

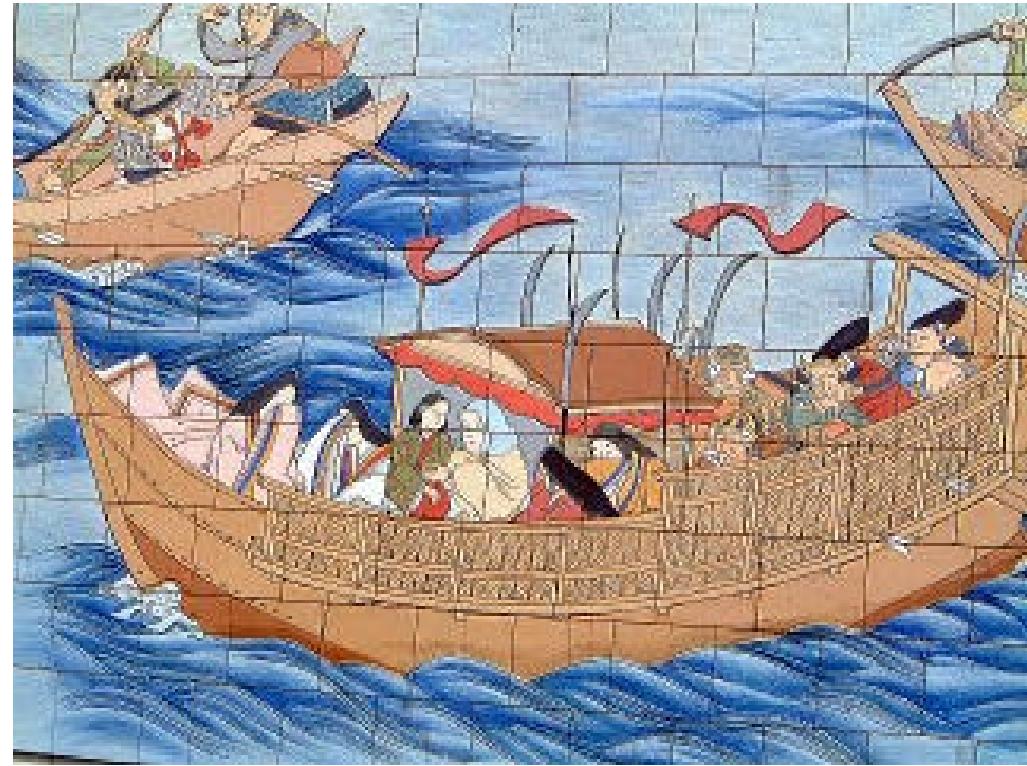
義経達は宇治川から醍醐・伏見を抜けて都に入り、木曾義仲の軍勢を  
破ります。頼朝の異母弟であり義経の異母兄である源範頼が総大将で  
ある源氏の本隊が、瀬田の唐橋で木曾義仲軍の抵抗に遭って手間取つ  
ている内に義経が先に都に入り、白河上皇のお褒めにあずかります。頼朝の承諾を得ずに叙勲を受けたことが、後々の義経の悲劇に繋がります。

# 平家物語 卷第十一 先帝御入水

平家は都落ちの後、西国で勢いを取り戻し、神戸の一ノ谷まで攻め上りますが、義経の鷦<sup>チ</sup>越の奇襲に遭い、一ノ谷の合戦で大敗、屋島の合戦でも敗戦、最後に壇ノ浦の合戦となり滅亡します。壇ノ浦の合戦の最終段階の「先帝御入水」の段を読んでみましょう。

二位殿(にゐどの)はこの有様を御覧じて、日ごろおぼしめしまうけたる事なれば、にぶ色の二衣(ふたつきぬ)うちかづき、練袴(ねりばかま)のそばたかくはさみ、神璽(しんし)をわきにはさみ、宝剣(ほうけん)を腰にさし、主上(しゆしやう)をいだき奉(たてま)ッて、「わが身は女なりとも、かたきの手にはかかるまじ。君の御供(おんとも)に参るなり。御心(おんこころ)ざし思ひ参らせ給はん人々は、いそぎつづき給へ」とて、ふなばたへあゆみ出でられけり。主上今年(ことし)は八歳(はつさい)にならせ給へども、御(おん)としの程よりはるかにねびさせ給ひて、御(おん)かたちうつくしく、あたりもてりかかやくばかりなり。御(おん)ぐし黒うゆらゆらとして、御(おん)せなか過ぎさせ給へり。

まづ東(ひんがし)にむかはせ給ひて、伊勢  
大神宮に御暇(おんないとま)申させ給ひ、其  
後西方淨土(そののちさいはうじやうど)の  
来迎(らいかう)にあづからむとおぼしめし、  
西にむかはせ給ひて御念佛(おんねんぶつ)  
さぶらふべし。この国は栗散辺地(そくさん  
へんぢ)とて心憂(こころう)きさかひにて  
さぶらへば、極樂淨土(ごくらくじやうど)  
とてめでたき処(ところ)へ具し参らせさぶ  
らふぞ」と泣く泣く申させ給ひければ、山  
鳩色(やまばといろ)の御衣(ぎよい)にびんづ  
ら結(ゆ)はせ給ひて、御涙(おんなみだ)にお  
ぼれ、ちいさくうつくしき御手(おんて)を  
あはせ、まづ東をふしきをがみ、伊勢大神宮  
に御暇申させ給ひ、其後西にむかはせ給ひ  
て、御念佛ありしかば、二位殿やがてい  
だき奉り、「浪(なみ)の下(した)にも都のさ  
ぶらふぞ」となぐさめ奉(たてま)つて、千  
尋(ちひろ)の底へぞ入り給ふ。



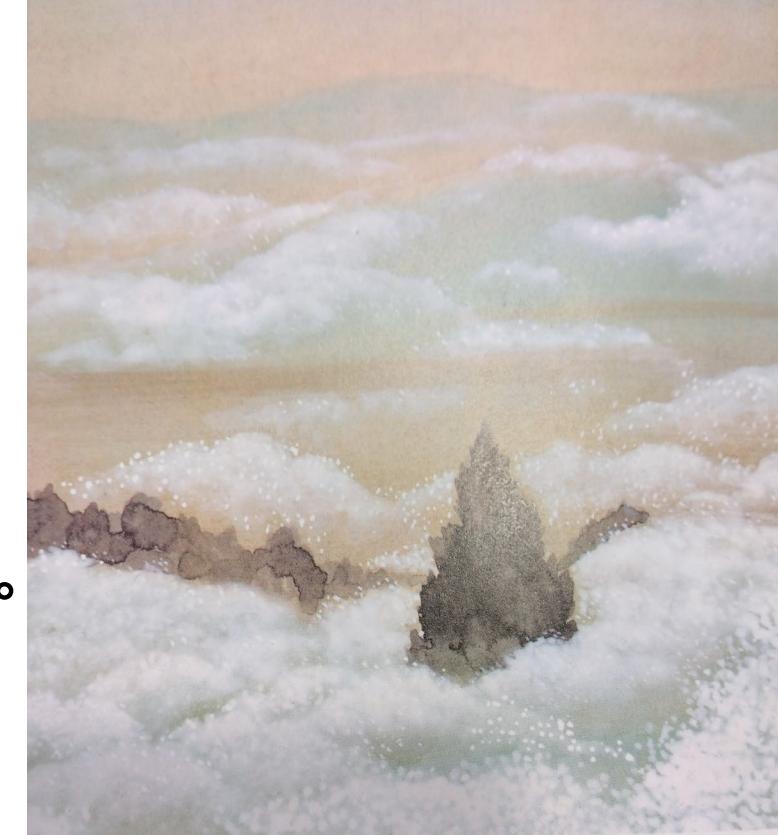
平家物語のさわりの部分を音読していただいて、琵琶を弾きながら語る平家琵琶法師の姿と聲を彷彿と思い浮かべていただければ、本日の目標は概ね達成されたと思います。

平安時代を通じて、平将門や藤原純友の乱などがあつて首謀者は処刑されることがあつても、刑罰は島流しなどが主でした。ところが保元の乱や平治の乱が勃発すると、皇室や貴族のみならず源氏・平氏も悉く同族が二つに分かれて骨肉相争う事態となりました。これ以降、処刑も斬首や磔などの極刑が当たり前になります。その極端な例が平家滅亡であり、栄華を極めた一族は悉く滅ぼされます。この悲劇の物語は、鎌倉・室町時代に広く庶民の間に流布され、さらに能やその他の文芸に多くの素材を提供し続けます。

ただ、平家滅亡の叙事詩としての平家物語には満足しなかつたのでしょう、後の世の作家「吉川英治」は「新平家物語」を執筆しました。今回は「新平家物語」について述べる時間はありませんが、吉川英治は悪逆非道の平清盛にも若い頃に辛苦の時代があったことを付け加えると共に、庶民の立場からの視点で戦乱の世を捉えます。宮中の楽人であった阿部の麻鳥は崇徳上皇の住んでいた神泉苑の水守りとなり、保元の乱の後には医師となり、庶民を救済する事になります。麻鳥の妻となる蓬（よもぎ）は、常盤御前の侍女で幼い牛若の世話をしていました。常盤御前が捕らえられた後は、後に麻鳥の妻となります。夫と共に貧しい人たちの救済に尽くします。

新平家物語の最終章は「吉野雛の巻」です。麻鳥と蓬の老夫婦が満開の吉野桜の下で往時を偲び、夜の人々の安寧を願うと共に夫婦の幸せを分かち合う場面で、この物語は終わります。

・皆様の平家物語への関心が高まり、原典に挑戦しようと/orする方が出れば、これに越したことはありません。



吉野の花は、立春から六十五日目ごろが、盛りだという。——谷を前にした崖ぎわの草のよい所に、二つのまろい背中が見える。満山の花に面を向けたまま、いつまでも、ただ黙然と、すわっている。

最も強いものが生き残るのではない。最も賢いものが生き延びるのでもない。唯一、生き残るのは変化できるものである。

（チャールズ・ダーウィン）

古来、全ての王朝（国家）が、やがて滅びる運命にあった。現在の世界の国々がどれだけ生き延びることが出来るか、また人類はどれだけ生き延びることが出来るのか？我々は、どう変化していくべきか？



吉野の花は、立春から六十五日目ごろが、盛りだという。——谷を前にした崖ぎわの草のよい所に、二つのまろい背中が見える。満山の花に面を向けたまま、いつまでも、ただ黙然と、すわっている。

